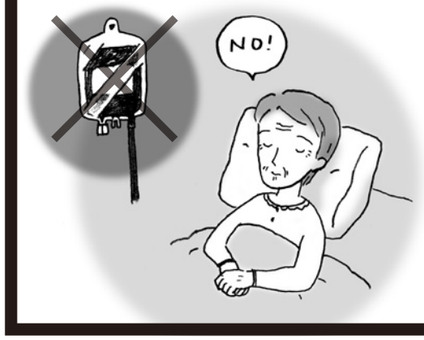
連載66 在宅医療奮闘記

平成7年より在宅を開始した私の思い出

（医）東西会 千舟町クリニック院長
橋本 満義（65歳・内科）

重症貧血であるけれど、宗教上の理由で輸血を拒否された患者さんの生き方



20年近く前のことです。当時40歳中頃の青年医師（？）だった私に、まったく経験したことのないショッキングな医療・治療判断が強いられたのです。

脳梗塞後遺症で、寝たきり傾向のある女性（70歳後半）が突然大量下血をしました。至急、輸血と出血原因究明のための精査が必要と思われました。しかし、後見人の方に病状説明をしたところ、高度な医療、特に輸血は必要ないと拒否されたのです。宗教上の理由ではありますが、予後不良であることは充分承知されていたのです。とりあえず、私の出身校の医学部へ確認してみると、このような事例では、ご家族の希望通りにすることが、司法判断であるとのことでした。

その患者さんは、たいそう人柄の良い方で、なんとか救ってさしあげたいという思いでいっぱいでしたので、それから一週間後に起こりうると思われる命の危険を考えると、私の心は乱れ、流れる涙をおさえることができませんでした。

現在、振り返って思うのは「何の為の宗教なのか？」「何の為の戦争なのか？」「何の為の学問なのか？」ということです。

生命というものは何にも増して尊いのではないのでしょうか。

20年前ころの社会保障の現場は、高度な医療が中心で、福祉・保健は付属的でした。

現在では、患者さんのニーズではなく、ディマンズ重視です。そして、クオリティ・オブ・ライフやノーマライゼーションの概念が重要視されてきました。

現存するヒエラルキーの日本において、患者さんディマンズ重視の仕事は、底辺の仕草のようです。つまり、「赤ひげ」を目指すことは、世間から低い評価を受けることとなり、それを目指す者はとても少ないのです。しかし、人の命を救う仕事は尊いので、治療者として真摯な行動が求められます。周囲の雑音には目もくれず、前進し続けることは、天（自然）が評価してくれ、愛（幸せ）が芽生えると思います。

「お医者さんが来てくれる」
24時間・365日態勢で対応（松山市全域）
私たちは質の高い在宅医療・看護・介護を目指しています。

医師数 19名
（常勤6名、非常勤13名）
内科・外科専門医 16名
（国立がんセンター勤務歴有3名）
精神科専門医 2名
麻酔科専門医 1名
（ペインクリニック科）
末期がん治療（緩和ケア）相談室開設!

Hyper Blood Viscosity（高血液粘度群）を科学する
臨床生命科学（体質・病態学、栄養学）研究所開設
機能強化型・有床 在宅療養支援診療所
（医）東西会 千舟町クリニック
松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788
http://www.touzaikai.jp/